

北の鳥人たち

藤 巻 裕 蔵

今回の鳥学ニュースは『北海道特集』ということで、北海道各地で活躍されている会員の皆さんに、それぞれ鳥とのかかわりについて書いていただくことにした。

以前、日本鳥学会の現況についてまとめられたことがあったが、会員数は大学・博物館・研究機関に職をもつ以外の人が多く、投稿論文もこれらの会員によるものが多かった。北海道でも状況はまったく同じで、自分の仕事の一部として鳥の研究をしている人は十指に満たない。昨年9月ソ連のエストニア共和国の首都タリンで行なわれた旧北区ツル・ワークショップに出席した際に聞いたことであるが、北海道の60%の面積、人口では1/3以下の157万人のこの国で、専門の鳥類研究者が28名も働いているとのことであった。

それはさておき、北海道の鳥人たちを紹介したい。まず川辺百樹（ひがし大雪博物館）、橋本正雄（釧路市立博物館）、近藤憲久（根室市博物館）中川 元（知床博物館）の4氏。それぞれの地域の博物館の学芸員として鳥類の研究、保護活動に活躍している。

次は飯嶋良朗、山本純郎、小杉和樹の3氏である。飯嶋さんの本職は獣医師で、日夜ウシ（町の人口よりウシの数の方が多い）と格闘する間に鳥の観察をしている。山本さんはフクロウ類にとりつかれた男で、シマフクロウ研究のため根室に定住してしまった。小杉さんは日本最北の島、利尻町の職員で、鳥をとおしての郷土の再発見に力を入れている。早矢仕有子さんは、現在大学院修士課程で研究している研究者の卵である。梅木賢俊さんは北海道自然保護課野生生物係で鳥類を担当され、北海道自然保護課の職員で、鳥獣行政の一端をになっている。

私自身はというと、山本さん同様北の鳥が見たくて北海道に移住してきた組であるが、関心はさらに北を指向していた。しかしその北の国も近くて遠い存在で、ロシア語の文献をとおしてしかうかがい知ることができなかった。自分で実際に大陸の自然・鳥を調査することができたのは1988年の日ソ共同ナベソル調査のときである。現在大学で教育・研究という仕事にたずさわっていて、研究テーマとしては主に鳥類群集に関心をもっている。しかし大学・大学院、その後北海道立林業試験場にいた間の研究対象はノネズミで、研究ということ意識して観察しはじめたのは、比較的最近のことである。

ここに紹介した以外に高校教師、医師などほかに職業をもちながら熱心に調査・研究や写真・映画撮影に活躍している会員が各地にいるが、今回は割愛させていただいた。



北 海 道 で は 今 ! — 鳥類研究最前線① —

私の研究テーマ

川 辺 百 樹

北海道と本州の植物相が津軽海峡に妨げられることなく連続的に変化する（例えばブナ林は渡島半島にも分布する）のに対し、両島の動物相にはギャップのあることが知られている。ユーラシア大陸の東縁に南北に花綏のように連なる日本列島の北の島、北海道の動物相の生物地理的位置づけとその由来を明らかにすること、これが現在から将来にわたる私の根本的テーマである。

この課題に迫るには現状の認識の深化が不可欠であるとの観点から、中央高地（大雪山系）をメインフィールドとする私は、もっか森林性鳥類と中央高地の高山帯に生息する鳥類の生息条件の分析に取り組んでいる。今調査中のミュビゲラの場合、彼らの生息条件としてある種の穿孔性昆虫が繁殖できるトウヒ類の老齢過熟木の存在や風倒による穿孔性昆虫の発生が重要な意味をもっているとの印象をいただいている。森林開発の始まる以前から個体数の多い種であったとは思われないが、近年の高標高地におよぶ巨木（老齢過熟木）の伐採による森林の若齢化の風倒木の素早い処理が彼らの生息にとって不利に働き、より個体数が減少しているのかもしれない。

1984年と同様昨年（1989年）もシロフクロウが、中央高地の高山帯に長期にわたり滞在した。両年ともその出現地点がトムラウシ山付近に集中していた。昨年のフィールドでの調査から本種の生息条件として地形的要因が大きな意味を持つことを見出した。それは彼らの採食習性と関わっている。

さて私に地史的スケールで思考することの必要性を教えてくれたのはセグロセキレイである。北海道ではケショウヤナギのあるところにセグロありである（逆は真ならず）。そのケショウヤナギは東シベリヤ、カムチャツカにも分布している。ここになぜセグロはいないのか、いつかこの河川を調べてみたいものである。



中央高地の自然を相手に最近やや体力の衰えを感じている。馬力のある若い共同研究者募集中！

私のフィールド・釧路湿原

橋 本 正 雄

釧路湿原は、すでに大正期からタンチョウとの関わりがあって野鳥の生息地として注目されてきた。さらに1980年、国際湿原保護条約の登録湿地に指定されたことにより、水鳥の生息地としての重要性を増してきている。

1971年、釧路市立博物館に就職していらい、釧路湿原をフィールドとすることになったが、面積約2万2千ha、日本の全湿原面積の60%を占める広大で原生的自然は、計り知れない奥深さをもっていて、とうてい全容を知ることとは不可能である。が、それだけに興味尽きないフィールドといえる。

これまでに、170種を超す鳥との出会いを持つことができた。

釧路湿原の約80%はヨシ・スゲが密生する低層湿原である。水位が高く、その大部分は立入ることが難しい。単調な環境のため生息する鳥の種類も限られてくるが、コヨシキリ、シマセンニュウ、マキノセンニュウなどウグイス科のものの生息密度は高く、5月下旬と

もなればその囀りで満ち溢れる。

また、その一隅のハンノキ林には日本最大級のアオサギのコロニーがある。湿原を歩くこと2時間ばかりで、コロニーに至るが、およそ100m四方の範囲に巣の数400余りを数える。

昨今、乾燥化の進行など釧路湿原の自然環境の悪化が懸念されている中、採餌場を湿原内に強く依存しているアオサギは、湿原の生態系の変化をモニタリングするには好対象のものではないかと考えられ、コロニーの踏査はなかなか大変であるが、毎年実施している。

1989年、釧路湿原では2番いのオジロワシが営巣したが、その内の1番いが抱卵途中で巣を放棄した。その原因は、人為的なものではないかといわれている。1987年、釧路湿原は国立公園に指定され、知名度は全国区となった。そして、その保護・保全が一層望まれている。私もその一助となるよう努力したいと思っている。

タンチョウの標識

近藤 憲久

昨年より、タンチョウ基本調査グループ（正富宏之代表）が中心となって、国の天然記念物タンチョウの戸籍登録と言うべき、標識調査が始まった。

これは、タンチョウが、昭和27（1952）年に給餌に成功してから暫時増加し、昭和63（1988）年には485羽を観察するに至ったが、個体数の成長曲線からは繁殖地の環境収容力がほぼ限界に近いことが示唆され、営巣数や雛数にも顕著な増加は見られていない。このため、繁殖開始年齢の高齢化、繁殖成功率の低下等が懸念されるところで、調査により、生態的性比・年齢構成・繁殖年齢・生態的寿命・家族関係等が推定され、健康な個体群構成を図るための基礎データを得ることを目的としている。

標識は、金属及びプラスチックリングを双方の足に装着することによって行なう。対象は、当初、幼鳥と亜成鳥を考えていたが、後者については捕獲の安全性が確信できないということで、現在は幼鳥のみ行なっている。現在行なっている調査は5ヶ年計画で、地方

分散個体群の資料収集に力点において、越冬地以外の繁殖地である根室・十勝管内で実施している。標識時期は6月下旬で、この時期、雛は50日齢ぐらいに成長していて、時期がどちらにずれていても標識は困難となる。作業時期の短かさと、この時期までの死亡率が50%を越えることなどから、2年間で8羽（1988年2羽、1989年6羽）に標識放鳥したにすぎない。これらの経過は、12月15日現在3羽（1988年1羽、1989年2羽）が釧路湿原へ戻って越冬中で、4羽（1988年1羽、1989年3羽）が死亡（3羽の死体回収）、1羽（1989年1羽）が不明となっている。幼鳥標識の場合、初期死亡率を考慮すると、現段階での生存数は、従来の幼鳥数から見て良好と言える。

いずれにしても、調査は始まったばかりで、結果がでるのはまだ先のことであるが、ひょっとしたら大陸の個体群との交流もという淡い期待も心の片隅には持っている。

知床をフィールドにして

中川 元

北海道の東北端、斜里町にある知床博物館の学芸員をやっています。都会育ち（といっても地方都市札幌ですが）の私が、茫漠とした道東の自然にあこがれて、この地に暮らしはじめたのは17年前、根室原野の自然の中で5年、そして知床をフィールドに仕事をすることになってもう12年もたってしまいました。

博物館では生物全般の担当で、鳥のことはやりやっているとはいきませんが、自然をいろいろな角度から見るができる楽しさもあります。鳥類の研究としては知床半島沿岸で営巣するウミウやカモメ類、オオワシやオジロワシの越冬地における生態などがテーマです。特に、冬の流水と鳥類の生態との関係に強い関心があります。オオワシは冬鳥の中で最も「氷」と関係の深い種と思われます。流水など海の氷の存在、湖や川の結氷や解氷がオオワシの渡りや越冬地の分布にどう関わっているのか、少しずつでも明らかにしていきたいと思っています。

このニュースが発行される2月には、オホーツク海は一面の流水に埋めつくされているはずで、毎年繰り返される光景とはいえ、

真っ白に輝く海を見るたびに新たな感動があります。ところが、「流水経験年数」は私よりずっと短いはずの息子達にはこの感動があまり伝わりません。ここで生まれ育った者には、「冬になると海が凍る」ことはあたりまえのことなのでしょう。

知床半島は「あたりまえの自然」が辛うじて残されてきた地域です。ここには北海道本来の動物相が人為的な影響をあまり受けることなく保存されています。研究フィールドとして、また、自然教育の場として、現在の自然環境を守ってゆくことも我々の役割だと思っています。

鳥とのつきあい

飯嶋良朗

私は獣医師であって、牛馬の診療を主業務としている。これら大動物は診療所に持参させるわけにはいかないので（手術の際は別だが）、治療が必要な時には、われわれが往診することになる。したがって、毎日、ほぼ同じ道を、同じ速度で車を走らせる。場所が北海道のいなかとなると、鳥が目につかぬはずがない。私のような鳥好きにとっては、かっこうの職種であり、土地である。私の診療車の助手席には、双眼鏡、記録帳、カメラが、聴診器とともに常備されており、往診のあい間に、季節ごとの鳥を見て楽しんでいる。時々「めずらしいもの」が現われるが、こんな時は、口を半開きにしてそれを眺め、気楽なバードウォッチャーをきめこんでいる。

こんな消極的な探鳥法でも、私の記録帳は記載で満パイになり、だいたい、私の町に生息する鳥が把握できたと思われたころに、これらを整理して野鳥リストを作ってみた。記録をまとめるという作業は、これが初めてではない。これより先に、いくつかの報文も作った。正直言って、論文を書くなどという作業は面倒だと思っていたし（事実、面倒だ）、私が持っているような記録が報告に値するとも考えていなかったのだから、それまで、鳥を見ること以外の活動に対しては消極的であった。どんな記録も発表しなければ、何の役にも立たないよ、と、記録を整理することを勧め

下さったのは藤巻裕蔵先生だった。スズメはたくさんいる。しかし、そこにスズメがいると然るべく報告されていなければ、そこにスズメがいることにはならない。このことは漠然と承知してはいたが、先生からあらためて指摘されて、より強く認識した。

私は系統的に鳥学を学んだ者ではない。シロウトである。しかし、自然現象を客観的にとらえるという態度は、自然科学を修めた者には共通のものだろう。恐いもの知らずとも言えるこの思い上がりで、私は報文を作り始めた。そして、今後も、鳥を見ること以外に、この活動を続けていこうと思っている。

私とフクロウ

山本純郎

私は、現在、北海道の東の端根室市に住みシマフクロウの調査を行っている。根室に住んで8年が経った。北海道に住みついた理由は、そこにシマフクロウがいたからである。暑いのは苦手だが、特別北志向というわけではなかった。以前は、大阪で公務員をやっていたのだが、シマフクロウを求めて北海道がよいが続き、かよい始めて10年目にして自分自身で区切りが付き、移住を決意した。

大阪では、近辺で見られるフクロウ類を自分なりのやり方で調査していた。また飼育することも好きで、一時動物園に勤めたこともある。何10羽ものフクロウ類を飼育した。飼育すれば、なき声や換羽、それに繁殖について色々なことが身近で見ることが出来る。それらは、野外調査の時、大いに役立った。シマフクロウに近似種のカッシュクウオミズク（*Ketupa zeylonensis*）を飼育した時は、なき声まで同じであって驚いた。試しにシマフクロウのテリトリー内でこのカッシュクウオミズクの声の録音テープを流すと、シマフクロウは、すぐに反応しその音源を必死に捜したものだ。

今行っている調査は、シマフクロウの親子関係である。それは他のフクロウ類には見られない生態で、幼鳥は長期間、親鳥のテリトリー内にいるということである。親わかれするのは3年目であったり時には、4年目であったりしている。つまり一番めのテリトリー



内に、前年度の若鳥と本年度の幼鳥がいることになり、その数は親鳥を含め6羽にもなることがある。大陸産のシマフクロウも同じような生態面をもっているが、さらに2年目の若鳥と本年度の幼鳥に同時期に給餌をすると報告もされている。北海道では、このような行動は未観察である。また親わかれした若鳥が、どれだけの距離を移動するものなのか、ほとんど知られていない。私は、2例だけ確認することが出来たが、その移動距離は、65 kmともう1つは、わずか6 kmであった。移動したのはいずれも3年目であったが、後者は、その年に繁殖を行い、前者は翌年であった。せめてあと数例は、分散した個体を確認したいと思っている。

私の利尻，そして鳥

小杉和樹

子どもの頃は、道路脇の石垣で営巣したハクセキレイのひなたちを、毎日覗きに行くといった子ども特有の生き物に対するの好奇心だけで、鳥を見て過ごしていました。そんな私が、自分の暮らす利尻島という土地に魅力を感じ、もっと利尻島を知りたいと思っている頃、今は亡き高野伸二さんの『フィールドガイド日本の野鳥』を手にしたのが、きっかけとなって鳥を見はじめることになりました。

休日は鳥を追いかけ走り回ることには明け暮

れ、様々な条件に恵まれた結果、ルリガラの初記録や何種かの稀少種を記録することで、利尻島での鳥の観察が益々私にとって重要な意義をもつようになりました。つまり、私と鳥とのかかわりは、鳥を見ることによって見慣れた利尻島を再認識するという、私と利尻島とのかかわりでもあるのです。

がむしゃらに鳥を見ていた頃から、ようやくこの頃落ち着いて観察出来るようになり、些細ではあるけれど毎日自分にとって新しい発見をすることによって、長くはない鳥とのかかわりも随分と深いものになりました。

今後は、地域の持つ特異性に更にこだわりながら、断片的であった利尻島の鳥についての知見を得るとともに、これまでの記録を正確に整理して行くことが必要かと考えています。そして、近接する礼文島をはじめ北海道日本海側の島嶼についても、範囲を広めて比較等ができるように、他の島嶼での観察や記録の収集をしていくつもりです。又、国内最北の地域であるにもかかわらず利尻島では、本州以北で記録の少ない種の観察が比較的多く、日本海を挟んでの極めて近接したソ連沿海地方を中心とした大陸との関係等については特に興味があり、フィールドでの観察にこれからも重点を置いて推察できればと考えています。

巣箱とビデオカメラとシマフクロウ

早矢仕 有子

大学に入学して大阪から北海道にやって来て7年、シマフクロウとつきあい出して3年が過ぎようとしている。大阪を出た頃は、もちろん、毎日コタンコロカムイの姿を拝み、その愛の唸りを聞きながら森の中で夜を明かす日々が来ようとは思いませんでした。その贅沢な暮らしに、シマフクロウの今日も自分の明日も忘れて浸りきってしまうこともしばしばだったが、大学院の研究テーマにシマフクロウの生態を選んだ以上、何とかしてデータと呼べるものを形にしなければならなかった。

稀少鳥獣を保護するには、まず相手の生態を明らかにする必要がある。特に繁殖に関するデータの蓄積が最重要である。そこで巣箱

とVTR装置を用いて、彼らの巣内の様子を覗き見させてもらうことにした。一家族のシマフクロウを追跡し始めて2年目の冬、ビデオカメラをセットした巣箱をかけ、祈るような気持ちで繁殖シーズンを待った。この研究の成否はペアが巣箱を使って繁殖してくれるか否かにかかっているのだ。一か八か、まるでギャンブラーのような心境である。

それだけにモニターの画面一杯に、巣の床にうずくまる雌親の姿が写った日の感激はとも忘れることはできない。

抱卵、育雛は順調だった。5月末に無事、2羽の若鳥が巣立った。

VTR利用の長所は、まず記録性である。ビデオカメラの導入により、データの質と量を飛躍的に高めることができた。しかも、対象動物への妨害の程度は極めて低い。今回、給餌内容や量、雛の発育や行動の発達に関するデータが得られたのもビデオ装置があったことだった。

今年、撮影方法等に改良を加えて再び、繁殖期の到来を待っている。プライバシーを侵害してしまった彼らへのお詫びとお礼のためにも、この研究を彼らの保護に役立てていきたい。

野生生物保護行政に携わって

梅木 賢俊

野生鳥獣の保護管理が叫ばれてから久しくなります。

私自身、北海道の鳥獣保護行政に携わるようになって15年が経ちました。この間、国の組織機構改正で1971年7月環境庁が設置され、従来、農林省にあった鳥獣行政部門が環境庁自然保護局鳥獣保護課の所管となりました。この国の機構改正に併せて都道府県においても、多くは林務行政の中にあった鳥獣保護行政が、主に環境行政部門に改組されたことは記憶に新しいところです。

こうした時代のすう勢の下に、年々野生鳥獣に対する人々の関心が高まり、ここ数年の野鳥観察者等の増加は目を見張るものがあります。また、傷病等鳥獣の保護収容などについての通報も多数寄せられるようになりました。

最近では、野生鳥獣のみではなく野生生物全般に対する人々の関心が高まってきたため、環境庁は1986年自然保護局に野生生物課を新設し、より幅の広い体制を作りました。

北海道においても1988年4月に組織機構改正が行われ、保健環境部自然保護課に野生生物担当の参事制度が置かれ、係名も野生生物係と改め、併せて鳥類及び哺乳類担当の主査がそれぞれ配置されました。

私の担当は鳥類で、主にタンチョウ、シマフクロウなどの特殊鳥類の関係と最近特に減少が著しいウミガラスなどで、それぞれに課題の多い鳥ばかりです。

1989年は、4月から5月にかけて空知管内美瑛市宮島沼で散弾の鉛中毒によるオオハクチョウの大量死亡事故が発生し、11月には釧路管内鶴居村で事故死したタンチョウの幼鳥の胃の中から罐飲料のプルタブが発見されるなど、野生鳥類に対する環境汚染が問題になった年でもありました。

野生生物の保護や対策について、感傷的な見解によると思われる意見などもありますが、行政側としても単に精神的な面だけの保護対策であっては解決策になりません。

1990年代に入った今日、行政に増々要求されることは、野生鳥獣の調査、研究による客観的な生態等に関する知見や生息個体数に基づいた的確な保護管理であると考えます。現状は、まだ十分ではない組織体制と予算が障害となっていますが、新たな進展のためにはより一層の世論のバックアップが必要ですので、鳥学関係者をはじめとする皆さんの御協力をお願いするとともに、日ごろの種々の貴重な情報の提供や御指導に対して厚くお礼申し上げます。

終りに個人的なことであるが、私の故郷小樽市の張碓海岸は、アオバトが海水を飲むために集団で飛来する場所として著名ですが、その繁殖等の生態についてはあまり知られていません。アオバトに対する関心も大いにありますのでよろしく御教示ください。

本年度の大会は 10月13・14日
金沢大学 で開催します。ご準備下さい。

前々号の鳥学ニュースに、樋口広芳氏がアメリカ合衆国における鳥類研究者の就職事情を紹介しているが、私が気のついた事を書き加えておきたい。

そのひとつは、アメリカの大学では、新任教官の採用にあたって、学生も評価に参加するように書かれているが、私の知る限り、ミシガン大学も含めて各大学とも、新任教官の選考は教官だけ、もしくは一部の教官だけで行う。絞り込まれた候補者が行う公開セミナーに学生が出席できるのは当然だが（多くの場合学外の一般の人も聴講可能）、学生に許されるのはそこまでである。一般に、アメリカの大学における教官と学生の身分の差は、日本の大学におけるよりはるかに大きく、かつきびしいように思われる。

アメリカでの研究者の就職事情を考えるうえでもうひとつの重要な点は、日本では就職イコール定年までの永久就職だが、アメリカの大学は期限付きの一時採用である。すなわち、ある期間（2～7年）に教官としての能力を十分に示さないと、雇用は継続されない。したがって、アメリカ人にとって就職とは数年間にわたるサバイバルゲームなのである。ただし、試用期間をすぎると地位は安定する。試用期間中に、教官の授業態度などについて学生にアンケートを求めることはよくある。しかし、これも一資料と考えられるだけで、学生が教官人事に関与するわけではない。アメリカの大学では学部主任の権限が非常に強く、学部主任の意見で人事が左右されることが少なくない。

~~~~~ N · E · W · S file ~~~~~

●「伏原春男遺稿」の出版

半世紀以上にわたって本会の会員（1924～1982）であった故伏原春男氏の遺稿集が長子夫人によってまとめられました。B5判202頁。自費出版、非売品。1944年から46年まで従軍軍医として中国湖南省を旅したときの記録「湖南省の鳥界」（1956、自費出版）を含む未発表記録のほか、「鳥」や「野鳥」に発表された20篇の論文や報告、それに随筆など合計64篇が収録されている。各地の自然誌関係博物館には寄贈され、個人には1部1,000円のカンパ（鳥類研究・保護にあてられる）プラス送料（1部310円）でわけられる。

希望者は（〒604）京都市中京区堺町通り御池下る 伏原長子、あるいは長谷川 博（電話）0474-72-1141内線3343, Fax 0474-75-1855まで。（長谷川 博）

●ビデオ機材製作を紹介します

鳥学会大会の際に幾人かの人たちから、巣の近くに設置する小型ビデオカメラや録画機（モニターを含む）などの入手法についての話題がでました。私の友人に機材を製作して

いる人がいますので紹介します。

ビデオカメラは市販されているナショナル製のVZ-C1で、長さ10cm位、径が4cm位の小さいもので、録画機（モニターを含む）も市販のVHS（12V、9.6V）8ミリ（ソニーワークマン、カメラ一体型ビデオも録画入力端子があれば可能）などが使えます。

友人の作っているものは、カメラ部と録画部をつなぐコネクターで、カメラから50m以上も離れて使えますので、巣の監視や観察に威力がでそうです。

値段はカメラや録画機、コード、バッテリーなど一切を含めると40万円位かかりますが、各パーツのみでも入手可能なようです。

詳しいことを知りたい人はご連絡下さい。ただし私はその種の知識はありませんので、自作しようとする人の相談は受けられません。（〒355）埼玉県東松山市松葉町4-2-14（電話）0493-23-1934（内田 博）

●山口県版繁殖地図を作成中です

1986年から4年がかりで野鳥の会県支部調査の一環として、皆さんの協力を得て実施した報告書を作成中です。県内及び北部九州を、

400メッシュに分け、2回以上の現地調査を実施し、2万件のデータを得ました。(’78年環境庁調査時に較べると今回の調査は約30倍の精度となっています。)データ解析にはBASICでデータベース用プログラムを自作してパソコンで処理しました。

報告書は下記の内容で、本文300頁、写真10頁 送料含みで¥3000程度の予定。ぜひ、会員の皆様の御一読をお願いします。

繁殖分布地図(約120種)及び解説/生息密度地図/調査地点標高分布表、環境要素比率分布表、鳥類別観察コード頻度表/繁殖時期一覧/調査データの品質管理/山口県繁殖関係文献一覧及び概説/調査にともなう興味ある観察記録(ケリの繁殖初記録他短報20編)//報文(人工建造物に営々する野鳥他数編)//繁殖に関する写真10頁約60枚。

報告書の発行は3月末の予定、申し込みは下記まで。

〒745)山口県徳山市栗屋坂田948-24  
(電話)0834-25-4469 (小林 繁樹)

### ●巨椋コミミズク調査7シーズン目に突入!

1983年11月、初めて巨椋池干拓田に足を踏み入れて丸6年、近く1500日目を数える迄になりました。この数字は、暇人が好フィールドを得たこともさながら、何といってもコミミズクの魅力によるところ大きく、11月から4月迄のシーズン中に寸暇を惜しんでほぼ毎日通いつめている結果であります。

さてそのコミミズク調査の成果たるや、単独の素人調査の悲しさ、なかなかまとまったデータが得られない上、昨シーズンには生息地をT字型に分断する京滋・京奈バイパスが開通、環境の悪化が追い討ちをかけています。

そうした中、今シーズンも1個の足環に夢を乗せて戻ってきた標識コミミズクの朗報。そして今シーズンもう一つの朗報は何人もの方の協力を得て継続調査を行っている事です。多くはテレビや新聞報道がきっかけで巨椋に足を運んだコミミズクファンですが、往復4時間近くもかけ毎日来られる大阪の川端夫妻に代表される熱心な協力者に支えられ、11月4日の初認以来一日も途切れる事なく調査は続いています。休日には10人に及ぶメンバ



ーで、各個体・各区域を分担し記録をとれるまでになりました。いずれ、罫からの出発時刻や活動範囲等の基礎データとあわせ、縄張り闘争や貯食行動等の興味ある生態記録も豊富な資料で共同発表出来る日も近い事でしょう。

巨椋のコミミズクは例年4月下旬まで見られます。興味のある方は是非おこし下さい。

(京都府城陽市・中川宗孝)

### ●東京港野鳥公園へ転勤

昨年10月、渋谷の野鳥の会事務所から受託業務先の東京港野鳥公園へ転勤になりました。太田市場に隣接する約26haの公園で、淡水池、汽水池、草地、樹林地などの鳥類の生息場所が造成されています。園内の生物調査、生息環境の整備、来訪者への解説が主な仕事です。もとは埋立地で、水辺環境を中心に設計されており、ヨシヤガマの過剰進出をおさえたり、砂礫地、湿地を維持し、オオバン、バン、ヨシゴイ、セイタカシギ、コアジサシなどの繁殖を計る計画です。汽水池は、冬期はカモ類、カモメ類の休息地になっていますが、渡りの時期には水門の調節により干潟を干出させ、シギ・チドリ類の採食場所に使う予定です。もくろみどおりにうまくいかどうか、面白いところです。

連絡先(〒143)東京都大田区東海3-1

東京港野鳥公園(電話)03-799-5031

月曜休園  
(日本野鳥の会・花輪伸一)

### ●「移入外来鳥」に注目しています

昨年の暮れに、立教大学で鳥学会主催の「ポスター発表会兼忘年会」が行なわれました。年末で祭日ということもあり、発表会は



こちんまりとしていましたが、一つ一つのポスター発表をじっくり聞くことが出来、大変有意義でした。

私は、これを機会に「移入外来鳥」であるハッカチョウ類の、日本への侵入・定着状況について報告しました。「移入外来鳥」は、日本古来の生態系を破壊するなどの様々な問題を抱えています。一方で安易に導入が行なわれているのが現状です。コブハクチョウや

ソウシチョウなども、知らない間に日本産鳥類になっているという可能性も、無きにしも非ずと案じています。今後、「移入外来鳥」についての動向に注目すると共に、外来動物の放鳥や導入については、慎重に対処していくことが期待されるところです。

(女子栄養大学人間動物学研究室 研究生・  
成末雅恵なるすえまさこ)

## 研究室紹介⑦

# 秋田大学教育学部生物学研究室

小笠原 高

秋田大学は奥羽山脈の西側、白神山地の南部に位置しており、野生生物の調査には絶好の立地条件を備えている。

秋田大学は教育学部、鉱山学部及び医学部の3部からなり、一般教育は教育学部が担当している。

教育学部生物学研究室は教官が5名おり、それぞれ専門が異なっているのはやむをえない。そのなかで私は主に生態学、分類学及び一般教育の授業を持っている。卒業生の殆どは小、中、高校の教師となっているが、私のも

とで卒論をやる学生は野鳥やその他の生態に興味とあこがれを持っている学生が多い。しかし、なかには将来理科の教師を志す学生で、いきたミズやカエルに触れることが出来ない女子学生が毎年いる。全く困ったものである。

幸い本年から教育学部に大学院(修士課程)が設置され、理科教育専修に6名の院生が入学し、そのうち5名が現職教師で、4名が私のところに張りついた。今は学部学生2名と院生4名、計6名の学生と共に野外調査研究を行なっている。

学部学生と院生をセットにし、市内にあるアオサギとゴイサギのコロニーで、両種の種間関係、近くの公園に設置した巣箱で繁殖するシジュウカラとヤマガラの繁殖生態及び両種の音声に関する研究、さらに八郎潟干拓地大潟草原に生息するオオセッカ、オオジュリン、コジュリン等の草原性鳥類の調査、更に女子院生はどうしても昆虫の生態をとということで、女性らしい、ハッカチョウトンボの生態研究を昨年からは始めている。

私自身の調査研究の対象はまだクマゲラから抜け切れず、ひまを見ては、学生、院生と共に天然ブナ林を歩き廻っている。

今年になって、県内でクマゲラの新しい生息地が数カ所判明し、さらに青森県側の白神山地で初めてクマゲラが営巣し、4羽の雛を育てた。

更に、最近、こうした野外調査の折り、野鳥の音声をレコーディングし、声紋分析に関する研究も学生と共に進んでいる。

私どもの学部は教員養成学部であるので、研究者を育てるというよりは、野生生物を通して、より広い視野をもった自然を理解出来る理科教師を育てるよう心がけているつもりである。



— 津戸基金によるシンポジウムの公募 —

1990年度のシンポジウムを公募します。特定の申請様式はありませんので、次の事項を書いて、本会事務所内基金運営委員会宛送付して下さい。①テーマ、②責任者名(会員に限る)、③会場・日時(予定で可)、④趣旨と計画の概要。締め切り日は3月31日必着。補助金額は3万円以内。シンポ終了後、講演要旨・決算報告・参加者名簿を提出していただきます。応募が2件以上あった場合は、審査により1件に絞ります。なお、これは本会主催の公募シンポで、他の諸団体との共催はご遠慮下さい。(基金運営委員会)

第20回国際鳥学会議に出席を考えている方へ

第20回国際鳥学会議は、ニュージーランドのクライストチャーチで本年12月2日から9日まで開催されます。出席を希望される方は多いと思いますが、問題はひまと金でしょう。ひまの方はさておき、最低の費用を概算すると、以下の内訳で約37万円です(NZ\$ 1=85円として計算)。

|                  |           |
|------------------|-----------|
| 1. ホテル代(\$63×9日) | 48,195    |
| 2. 生活費(\$50×10日) | 42,500    |
| 3. 会議参加費(\$675)  | 57,375    |
| 4. 晩さん会(\$65)    | 5,525     |
| 5. NZ往復航空券       | 210,000   |
|                  | 計 363,595 |

上記のホテル代は会議事務局の斡旋する大学のドミトリー(全部シングルで朝食・夕食付)を利用した場合で、3月31日までに予約金\$200を払って予約し、9月15日までに残金を支払います。会議参加費も3月31日までに払い込みます(4月1日以降は\$900;学生は\$250)。生活費は昼食代・市内の交通費・

小遣いなど、NZ往復航空券は昨年の割引き実績の平均です。航空券の割引率は、利用する航空会社、ルート、日程、手配を依頼した旅行社などによってかなりの差があります。

12月初めはNZの観光シーズンですから、航空機・ホテルとも満パイが予想されます。航空券は少なくとも出発の2か月前に手配し、ホテルも必ず予約します。会議の10日ぐらい前になってホテルや格安の航空券をさがしても、まず無理でしょう。ただし、格安の航空券の多くは解約や予定変更ができませんから、ご注意下さい。荷物も20kg以上は高い超過料をとられます。

上記の概算は、エキスカージョン参加費、海外旅行保険、パスポート代、成田空港往復、空港使用料、土産代、その他の諸費を含んでいません。大学のドミトリーでなく一般のホテルやモーテルに泊ると、朝食・夕食代も別に必要です。なお、研究発表の申し込みも3月31日到着が期限です。(森岡弘之)

【新編集委員】

今回、齊藤隆史・江崎保男の両氏が新しく編集委員に就任した。この結果、学会誌の編集陣は、森岡弘之・正富宏之の正副両幹事と江崎保男・藤巻裕蔵・松岡茂・中村浩志・中村登流・齊藤隆史・上田恵介・山岸哲・Mark Brazilの9名の編集委員で構成される。編集委員は編集幹事の諮問に答えるほか、評議員会にオブザーバーとして出席し、意見を述べることができる。(編集幹事)

【会計幹事から】

前回のニュースでお知らせしたように、今年度から普通会費が年間5,000円に改定されました。4,000円を納入された方は、出来るだけ早い機会に不足分の払込をお願いいたします。次の方々から御寄付をいただきました。感謝申し上げます。鳥学基金(仮称)として積み立てます。(福田道雄)

藤原廣蔵氏 20,000円、谷口一夫氏 5,000円、佐藤啓氏 5,000円、小林広幸 1,000円

鳥学ニュース No. 34

1990年2月28日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒169) 東京都新宿区百人町3-23-1  
 国立科学博物館分館内 (振替) 東京 1-6599  
 (電話) 03(364)2311  
 発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷